DOI 10.18995/24344710.10.140

翻訳

Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン(*Dora Thorne*)』(翻訳・その２４)

堀　啓子

これまで『東海大学紀要　文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要　文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(*Dora Thorne*)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十四回目となるこのたびは、第二十九章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続いて Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

＊本稿は、科学研究費補助金【基盤研究（C）】[課題番号：２１Ｋ００２９０]による研究成果の一部である。

二十九章

夕食会は終わり、馬車が次々に館に訪れてきた。室内は次第に混み始め、音楽や話し声、笑いさざめく声があふれていった。

「私と交わしてくださったお約束をお忘れではないでしょうね、ミス・アール？」とエアリー卿は言った。「最初と最後のダンスは必ず、そしてそれ以外もできる限りは一緒に踊ってくださるという。」

「忘れてはおりませんわ。」とベアトリスは応じた。この世の誰よりも彼を愛していたが、ベアトリスは彼と一緒にいると落ち着かなかった。だが自分がそれほど彼を愛しているということ、そして彼が自分に好意を持っているかどうか知りたいという自分の思いには気づいていなかった。

舞踏会が始まり、この集まりに関するゴシップや噂が飛び交った。ギャスパー・ローレンスも訪れていた。彼はベアトリスに一緒に踊ってほしいと頼むべきかどうか二時間以上も逡巡していた――彼女はあまりにも美しく、高嶺の花だった。ギャスパーは彼女を愛さずにはいられなかった――愛さないなどありえないことだった。一目ぼれだった。だがそれはつつましい、望みのない崇拝の類のものだった。ベアトリスに求婚するくらいなら、王女に求愛してその愛を

勝ちとるほうがよほど容易だっただろう。

ようやく彼は勇気をかき集めて彼女を踊りに誘い、明るい微笑と親切な言葉に報いられた。あわれなギャスパー！その美しい顔が近づいて、肩に彼女の手がかかると、彼は夢見心地だった。

「これで」と、ダンスが終わると彼は言った。「私は二度とダンスはしません。このワルツの記憶を忘れてはなりませんから。」

「なぜですの？」と、ベアトリスは不思議そうに尋ねた。

「率直に申せば」と、ギャスパーは悲しげに言った。「報いられはしないでしょうが、私はあなたを愛しています、この愛は、ミス・アール――あなたが立っている地面さえ聖地に思えるほど深いものなのです。」

「それほど弱気な告白ではありませんわね。」と、ベアトリスは微笑みながら言った。「あなたは勇気がおありですわ。私はあなたにたった三回しかお会いしておりませんのよ。」

「それは何の関係もありません。」とギャスパーは言った。「たとえ一度しかお会いしていなくても、毎日お会いしていたとしても。あなたを煩わせたくありません、ミス・アール。私に優しい気持ちを持っていてください――それ以上、何も望みません。ただ忘れないでください、危険からあなたを守るために立ちはだかる男が――あなたのために命を捧げる男がいることを。お忘れにならないでしょうね？」

「忘れません。」とベアトリスははっきり言った。「そのような言葉を忘れられるはずがありません。あなたとはお友達になりたいですわ――大切な方です。」

「どんな女性から向けられた愛情よりも、あなたのとの友情のほうが嬉しいです。」とギャスパーは嬉しげに言った。

ちょうどその時、アール卿が近づいてきてミスター・ローレンスを伴って行った。ベアトリスは、彼が立ち去ったその場に、そのまま立ちつくしていたが、そこは珍しいアメリカ産の美しい花と豊かな葉がその姿を半ば隠してしまう場所だった。思いやり深い優しい表情が、その美貌を柔和にしていた。彼女はギャスパーが好きで、彼が彼女を愛していると聞いて嬉しくも申し訳なく感じた。こうした愛情から来す心地よい賞賛――強く勇敢で才あふれる男性たちがすべてを彼女の足元に投げ出してくるという――そして彼女の表情、微笑、言葉が、彼らには他の何物にも代えがたいものであるということを知ることはとても喜ばしいことだった。

それでも彼女はギャスパーに申し訳なく思った。何の見返りも求めず全霊を捧げて誰かを愛するのは、悲しいことに違いなかった。彼女は彼の友人にはなりたかったが、それ以上の存在にはなれなかった。彼を心から敬愛し尊敬することはできても、愛情を与えるこ

とはできなかった。

彼女の誇り高く美しい唇は震え、輝く瞳は涙で曇った。そう、彼女の愛は無理だった――その愛は与えてしまっており、取り戻すことはできなかった。この広い世界のすべての男性たちのうち、エアリー卿の顔だけがくっきりと浮かび上がった。どんなことが起ころうとも、アール卿の娘は、他の誰をも愛せないことがわかっていた。

彼女は上から垂れ下がっている一輪の真紅の花を手に取り、心ここにあらずという風情で考え込んでいた。彼女の目には花も葉も映っていなかった。彼女はエアリー卿の顔を思い浮かべ、彼が最後に彼女に言った言葉を思い返していたが、突如として影が落ち、慌てて見上げると彼が自分の傍らに立っていた。彼は日ごろの様子に似ず、青ざめて不安そうに見えた。

「ベアトリス」と彼は言った。「あなたとお話しせねばなりません。どうぞ、ここにいる人々のいないところへ私とご一緒ください。もうこんな不安定な状況には耐えられません。」

彼女は彼を見て断ろうとしたが、彼の表情には何か抗いがたいものがあった。というのも、エアリー卿はギャスパー・ローレンスを――彼が彼女と踊り、そのあとで話し込んでいる様子を見ていた。彼は彼女の和らいだ表情を見て、半ば平静を失っていた。人生で初めて、エアリー卿は激しい嫉妬を感じていた。彼はこの美しい髪をしたギャスパーを、彼の語ったドイツの恋愛物語や詩情と共に嫌悪していた。

自分も何としても死守したいと願っている栄誉の賞を、彼が手に入れることができるのだろうか？彼はどんなことを話して彼女の表情を和らげたのだろう？彼は何を話して、自分が見たこともないような優しい光を彼女の目に宿し、彼女をそこに立ち尽くさせて、その場を離れたのだろう？こんなあやふやな状況には耐えられなかった。求婚するのに舞踏会場はふさわしい場ではないだろうが、彼は自身の運命を知らねばならず、運を天に任すよりなかった。彼は彼女のもとに行き、一緒に来てくれるよう求めた。

「どちらにいらっしゃるのです？」とベアトリスは突然尋ねた。というのもエアリー卿は急ぎ足で続き部屋と長い温室を通り抜けたからだった。

「ここには他の人がまるでいないわけではありませんよ。」と彼は答えた。「ほら、あそこにローレンス卿夫人とミスター・グレシャムが、暖かい室内よりもここのローズ・ガーデンを好んでいらっしゃるでしょう。あなたとお話しせねばなりません、ミス・アール。今、お話しさせてください。」

彼らは色とりどりのバラが咲き誇る美しい庭に立っていた。辺りは濃厚な芳香に充ちていた。月は夕空に明るく輝いて、その銀の光の洪水の中に花々を埋めていた。

その眠れるバラの中に小さな飾り気のないベンチがあった。ベアトリスはそこに腰を下ろし、愛する人の顔に浮かぶ強い感情を見て不思議に思っていた。

「ベアトリス」と彼は言った。「私はもう耐えられません。なぜギャスパー・ローレンスはあなたの方に身をかがめていたのでしょう？彼は何を話したのです？私の最愛の人よ、私がどんなにあなたを愛しているか――強く深くあなたを愛するがゆえにあなたなしでは生きられないほどだということをおわかりではありますまい？一目あなたを見た時から私があなたを愛していることをご存じないのでしょう？ベアトリス、私の言葉は充分ではないでしょう。私をごらんください――筆舌には尽くしがたい私の愛情を、私の表情からお読み取りください。」

だがベアトリスは決して顔を上げなかった。輝く金色の愛の光が降り注ぎ、彼女はめまいがした。

「私を遠ざけないでください、ベアトリス。」と、彼女の両手を握りしめながら彼は言った。「私は強い男で、気弱になったりはしません。ですが、信じてください、もしあなたから遠ざけられたら、私は死んでしまうでしょう。人生のすべての希望はあなたと共にあるのです。ベアトリス、私に好意を持とうと努めてくださいませんか？」

彼女は彼を振り仰いだ――月光がその黒い瞳に輝く美しい涙を照らした。彼女はただ、こう答えた。「私から離れないでください――私はあなたが好きです。愛する人――愛おしい人――ご存知でしたでしょうか？」

美しい顔と震える唇はすぐそばにあり、エアリー卿は口づけてその涙を拭い去った。そして握りしめていた彼女の両手にもキスをした。

「あなたは私の――私だけのものです。」彼はささやいた。「死が二人を分かつまで。そう仰ってください、ベアトリス。」

「私はあなたのものです。」そう彼女は答えた。「たとえ死の間際にいたとしても。」

それはほんの半時間ほどであったが、幸せに満ちており、決して忘れえぬ記憶となった。

「私は行かなくては。」ついにベアトリスは、彼女の手を固く握りしめている彼の手を離しながら言った。「ああ、エアリー卿、私はどんな顔で友人たちに会えば良いのでしょう。どうして明日までお待ちくださらなかったのです？」

「待てませんでした。」と彼は言った。「それにそうしたら、あなたはこんなには優しくなかったでしょう。」

彼は彼女の率直さを何より愛していた。庭を離れる時、エアリー卿は白いバラを集めてベアトリスに渡した。ずっと後に、この葉が黄ばみ乾燥した頃になって、このバラは見つかった。

彼らはこの温室に数分たたずんで、舞踏会場に戻った。

「もう全てのワルツは私と踊ってください。」とエアリー卿は言った。「そしてベアトリス、私は今夜アール卿に話します。よろしいですね？」

もちろん彼女に異存はなかった。これほどはっきりと誰かのものになることはとても幸せなことだった。そして自分よりも強い意思を感じるのも嬉しいことだった。自分が彼を愛していることが世間にどれほど早く知れ渡っても彼女は気にならなかった。ただ、なぜ彼が言葉にできないほど嬉しそうなのか、ということだけが不思議に思われた。

（以下、次号）